

私のタイ手術体験

1. 除睾編

タイへ第一回目渡航：7日間

・ 辜丸摘出 - ピチエート整形外科センターにて

私が初めて(株)ジェイ・ウェブ・クリエーション を利用したのは今から6年前の2005年8月、ふとしたきっかけで、「タイで辜丸摘出パック」なるものをネットで見つけ、申し込んだのが最初だった。

なぜそんなものに申し込んだかを説明したら、一冊の本が出来てしまうのでここでは語らない。まあ、簡単に言えば人生に魔が差したということだろう。そのころ仕事を持っていた私は、夏休みを利用してタイへ行くことにした。「バカンスに行くので」という理由で旅行会社に依頼し、ANAのチケットを予約した。

当時のタイ空港はターミナルが二つに分かれていた。ANAが着くのは第2ターミナルだった。予定時間よりやや遅れてバンコクに着いた私は、迷いながらもターミナルの外へ出ることができた。スーツケースを引きずって歩いて行くと、約束の場所に横須賀氏が待っていた。彼は紳士的な態度で私からスーツケースを受け取ると、駐車場まで案内してくれた。

駐車場には一台の車が待っていた。運転席に若いタイ人女性が座っていた。世間話をしながら宿泊先のレジデンスへ向かう途中、横須賀氏は大きな建物を指差し、「あれが手術をする病院です。手術は全身麻酔で行います」と教えてくれた。私は辜丸摘出に全身麻酔をするのかと、少し驚いた。

翌日クリニックに連れて行かれた。なにやら雑然とした理髪店のようなだった。医師の名はピシエットとあって、スポーツマンらしいハンサムな医師だった。元パイロットをしていたらしい。

クリニックでは、手術に関する同意書に、手が疲れるほどなんどもサインをさせられた。サインが終わると横須賀氏から、「これから病院へ向かいます。そこで先生から『なぜ辜丸を摘出するのですか』という質問を受けます」といわれた。

私が「どう答えればいいのか」と問い返すと。彼は、「いろんな理由があるでしょうが、一番良い回答は、『将来性転換をしますので、その前段階として辜丸を取ります』という回答です。以

前ご夫婦で来られたお客さんが、『性欲をなくすため』というような回答をされ、手術が出来なかったことがありました」と教えてくれた。さらに、「本当に性転換したかどうかなんて追跡しませんから」と、彼は言葉を添えた。

病院に移動した。手術は午後2時半ということだった。私は医師との面談に呼ばれ、個室に入った。横須賀氏とタイ人女性が同伴した。タイ人女性は、手にビデオカメラを持って、質問に答える私を録画し始めた。どうやら証拠物件にするらしかった。

「なぜ睾丸を摘出するのか」と医師から質問され、私はかねてから打ち合わせ通り「将来の性転換に備えて」と答えた。すると医師は笑顔を作り、「OK」といって握手をしてくれた。私はホッとした反面、嘘でもカメラの前で「性転換をします」といった自分がはずかしかった。性転換など全く考えていなかったからである。

手術に入る前、横須賀氏から「背中に麻酔注射を打ちますが決して痛くありません。ただ動くと危険なので動かないようにしてください」と念を押された。私が不安そうに見えたのか、「もう、ここまで来たのですから」と、覚悟を決めろといわんばかりの言葉を、彼はさりげなくかけた。

麻酔の医師が来て、ベッドで横向きになった私の背骨にゆっくりと注射針を差し込んだ。やや腰に近いところだった。私は緊張しないよう深呼吸を繰り返した。麻酔が無事終わると手術室へ移動させられた。そこで待っていた数人の看護婦が私の足をつねって、日本語で「痛い?」と聞いてきた。私は答えようとしたが、そのとき、す〜っと意識を失った。

覚醒すると、そこはまだ手術室の中だった。カチャカチャと手術道具を片付けているような音が聞こえたので、「フィニッシュ? (終わった)」と英語で聞くと、「イエス」と看護婦が答えた。しばらくして病室に運ばれた。麻酔がまだ効いているせいか、腰の辺りを触れても感覚がなく、なにか物に触れているようだった。ペニスは包帯で覆われ、カテーテルが差し込まれていた。痛みはなかった。

最初の食事で起き上がろうとしたが、下半身に力が入らなかった。無理に体を起こしたら、「オーノー」と看護婦が心配そうに近づいてきて、私の体を支えてくれた。そして優しくスプーンで食事を食べさせてくれた。夜、横須賀氏が見舞いに来てくれた。

翌日、目玉焼き二つだけの朝食を取った。カテーテルも抜かれ、椅子に座ってバンコクの景色を眺めていたら、横須賀氏が迎えに来てくれた。預けてあった現金を受け取り、金額を確認してサインした。

横須賀氏が、「そこに摘出した辜丸がありますが、持って帰りますか？それとも捨ててもらいますか？」と聞いてきたので、私は迷わず「捨ててください」と答えた。以前ニューハーフを扱ったテレビ番組で、“辜丸を大事に持っているニューハーフの子は幸せになれない”などといっているのを思い出したからだった。

退院から帰国まで、私はタイ観光に明け暮れた。スカイトレインに乗ってルンピニーパークへ行き、さらに地下鉄に乗り換えてチュチャチェパークまで行った。翌日にはクイーンクリケットナショナルユニバーサルセンターまで行ってみた。術後であることなど気にせず、ずい分な距離を歩いて回った。

公園のトイレに入るのにお金がかかるのに驚いた。また、バザールに体の不自由な物乞いがいるのにも驚かされた。レストランで水を頼むとお金を取られた。タイでの数日は、正に現実離れした不思議な時間だった。

帰国の日が来た。抜糸のため病院で医師のチェックを受けた。しかし困ったことに傷口がまだふさがっておらず、抜糸は出来ないという診断だった。私は焦った。レジデンスでおとなしく養生していれば良かったと、改めて歩き回ったことを後悔した。

横須賀氏が、「そのうち糸は抜けてきます。でもどうしても心配だったら自分の体のことですから、日本の病院へ行ってください」とアドバイスしてくれた。私は、「日本の病院など行けるか」と、そのとき心の中で思った。

帰国の途に着く前、横須賀氏の事務所に立ち寄った。高層マンションの33階にある一室だった。数時間の雑談の後、女性ドライバーから空港まで送ってもらった。

飛行機が離陸した。窓からバンコクの夜景が見えた。夜景は少しずつ遠くなっていった。夜景が消えると、それまでのタイでの出来事が夢のように回想された。

日本に着いた私は、何事もなかったように仕事に戻った。タイで横須賀氏が言った通り、手術で縫い合わせた糸も自然に抜けてきた。変わったことといえば、マスターベーションをしなくなったこと、すなわち性欲が完全に途絶えたことだった。

ホルモンを服用し始め、脱毛エステなどに通い始めたのもこの頃だった。何気に始めたその行為が、後戻りできない道への序曲であることをそのときはまだ知るよしもなかった。

ホルモンの効果が現れると嬉しくなった。ひとたびこの連鎖が始まると、それはまるで原子炉がメルトダウンを起こしたように制御不能になった。行き着くところまで止められないのだ。

結果、私はこの5年後、SRSのため再びタイを訪れることになる。ビデオカメラの前で証言した嘘が、現実になったのである。

2. FFS・声の女性化編

タイへ第二回目の渡航：40日間

- ・FFS - スポーン・クリニックにて
- ・声の女性化 - ヨーサガン・クリニックにて

2010年6月、私は再びタイ訪問を決意した。このとき実施しようと考えた手術は、FFS、豊胸、声の女性化、そしてSRS、すなわち行き着くところまで行き着いたのだ。「やるなら全部やる。逃げ道は残さない」これが私の出した結論だった。

依頼先はもちろん5年前お世話になった(株)ジェイ・ウェブ・クリエーションで迷いはなかった。ネットで(株)ジェイ・ウェブ・クリエーションを検索すると、以前と比べずい分ホームページがにぎやかになっていた。飛行機のチケットも自分で手配する必要がないとのことだった。

タイへ降り立った。指定の場所で待っていると、スタッフの山元氏が来てくれた。彼の車で事務所へ向かうと、そこは以前の高層マンションの一室とは違い、いかにも事務所らしい明るい雰囲気になっていた。5年ぶりに横須賀氏と会った。送迎から病院への見舞いまですべて一人でこなしていた彼も、今やしっかり社長業に専念しているようだ。

翌日、GID診断書を取った。さらに次の日、最初の手術であるFFSを受けるため、スポーンクリニックへ向かった。麻酔の女医と打ち合わせた後、スポーン医師との面談に入った。スポーン医師は私の顔を真剣に見つめ、「眉骨が高くないのでラッキーだ。鼻はいじらなくていい。顎は大きいと思うか」などといいながら、どこをどうするか分析しているようだった。

最後に、「術後しばらくは顔が腫れる。引き上げた眉が本来あるべきところに落ち着くには6ヶ月かかる。顔の手術は場合によって大きなストレスを生じさせ、『理想と違う』と悲観して自殺する

人もいる。だから6ヶ月は鏡を見るな。6ヶ月過ぎた頃からあなたの顔があなたのものになる」などといわれた。さらに「手術時間は7時間」といいわたされた。

同伴していた山元氏が、「この部屋の窓が閉めてあるのは、あなたが飛び降り自殺しないようにですよ」と、しゃれにならない冗談をいった。FFSをスポンクリニックでするお客は(株)ジェイ・ウェブ・クリエーション開業以来私が初めてとのことだった。正にまな板の鯉だった。

手術室に運ばれた。麻酔の女医が「エキサイティング？」と笑顔で聞いてきた。間もなく、あのスポン医師が真剣な表情でこちらに歩いてくるのが見えた。と、その後の記憶がない。一瞬にして意識を失ったようだ。

目が覚めた。というか、山元氏の「ゆっくり大きく息をしてください」という声でやっと意識が戻った。どうやら麻酔に酔ってしまったようだ。鼻には酸素吸入のためのチューブが入れられていた。とにかく寒かった。呼吸は浅く、すぐにまた眠たくなった。酸素濃度を量る器具が、やたらとピーピー警告音を鳴らしていた。

私は鏡を見たくなかった。医師からは見るなといわれていたが、やはり興味があった。山元氏に鏡を頼んで覗き込むと、まるでエジプトのミイラのように包帯にくるまれた自分の顔があった。目元と鼻だけが見えた。「子供の顔みたいですよ」と私がいうと、山元氏も「そうですね。でもあまり見ないほうがいいですよ」と答えた。

夕方、ジップさんと名のる若い女性が来て、「今晚あなたの見張りをします。何かあったら用事を言いつけてください」といって、壁際の椅子に座り、じっと私を見守っていた。私がエアコンを切って欲しいと依頼していたので、彼女にとって部屋はとても暑かったはずだ。しかし彼女は一晩中一睡もせず私の様子を窺っていた。山元氏に「なぜ私は一晩見張られていたのですか」と聞いたら、彼は「全身麻酔をかけた患者は、最初の夜が一番危険なんですよ。その見張りです」と答えた。どうやら病院側も私の容態を気にかけていたようだ。

入院したエーカシオン病院の食事が口に合わなかった。麻酔のダメージもあって食欲も出なかった。体力回復には食べるのが一番と分かっていたが、スープの臭いを嗅いだけで気持ちが悪くなった。5年前の睾丸摘出術のイメージから、手術を軽く考えていた私は、以後の日程に少し自信をなくした。

退院後、横須賀氏の事務所にあるビジタールームでお世話になった。横須賀氏の奥さんエーオさんと義妹ペーオさんが毎日食事の世話をしてくれた。スプーンでの食事に比べ生きた心地がした。しかし体調はまだ回復せず、口、額、目元、眉間と、執刀した箇所から次々と発熱し、体力も落ちて足が折れそうなくらい細くなった。

体力アップのため事務所の周りを散歩した。最初は10メートル歩いただけで冷や汗が出てよろめいた。元来丈夫な私にとって、こんな経験は初めてだった。SRSまで1ヶ月を切っていたこともあり、一度帰国して体力回復を待つことを横須賀氏に申し出た。ただせっかくビザを取ってきたので、声の女性化だけはしていくことにした。

夕食のとき、横須賀氏とよく話をした。彼は日本での苦労話をときおり聞かせてくれた。顔の腫れも少し落ち着いてきた頃、「ずい分イメージ変わりましたよ。スプーン先生はやることが半端じゃなくて徹底してますから。他の医師ならそんなに変わりませんよ」と横須賀氏がいった。山元氏も、「あの先生、自分の好みに合わせて顔を作ってるんじゃないですか」と面白いことをいった。ところで、横須賀氏が私を覚えていないことに驚いた。彼が、「今度のお客さんは睾丸を取ってあるんだ、と思いました」と妙なことをいったので、私が、「そのときアテンドしたのはあなたですよ」というと、「え、そうでしたっけ」と慌てて昔の顧客を検索し、私の写真を探し始めたのだ。そして「これは分かりませんよ。今とぜんぜん違います。へー、ホルモンで人の顔ってこんなに変わるものなんだ」と妙に関心したようなことをいうと、山元氏もその写真を見て、「確かに。ぜんぜん面影ありません」といった。その写真は私のパスポートの写真だった。

少しずつ体力も回復し、長距離を歩けるようになった。SRSも今回はキャンセルしたことで、気も楽になっていた。ときどきエーオさんとペーオさんが買い物に誘ってくれた。夕方、ラーマ9世公園へウォーキングにも一緒に行った。

スプーンクリニックへフォローアップに行くとき、二重まぶたにした糸が目立ち、恥ずかしくサングラスをかけて行った。それを見て横須賀氏が、「タイではそういうのは隠さず見せびらかすのです。『自分は手術できるお金があるぞ』と自慢するためにね」といった。私はなるほどと思った。

近所にイスラムの寺院があり、興味本位で近づいてみた。すると突然イスラム服の男性に「何をしてる」と声をかけられた。私が、「ただ見ていただけです」と答えると、男性は、「お前はイスラム教徒か」とさらに聞いてきた。「いえ、私は日本から来て近くに宿を借りているものです。寺院に興味を持ちまして」と私が返すと、「よし、中へ入って良い」と入場を許可してくれた。私は生ま

れて始めてモスクの中へ入ってみた。

声の女性化の手術を著名なヨーサガン医師から受けた。手術に先立ち、先ずエッセーを読んでその声を録音された。次に歌を歌えといわれたので、私はドレミの歌を歌った。その後胃カメラを飲むときのように、麻酔を口に含んで喉の奥を麻痺させ、ファイバースコープを飲まされそのまま声を出させられた。声帯の振動を確認するとのことだった。

手術後、心配した麻酔による後遺症はなかった。術後 2 週間は話すことが出来ないということで、スタッフや看護婦とは筆談になった。話が出来ないということが、これほど難儀とは私は思わなかった。声がどうなるか不安はあったが、とにかく喉仏を取ることで意味があった。約 40 日間のタイ滞在後、私は日本へ一時帰国した。

帰国後、しばらくして声を出してみたが、声にならなかった。というより、喉頭がんを患った患者が、喉の奥からやっと絞り出すような太いがらから声だった。術後 2 ヶ月くらいは相手から「え、なに」とよく聞き返されたが、3 ヶ月ほどでようやく会話に支障がなくなった。しかし声はまだ太くかすれ、しかも毎日のように音質が変わった。低い声といえ、それはもはや手術前のオリジナルの声ではなかった。落ち着くのに 1 年はかかるといわれた。

横須賀氏が面談会を開催するため日本を訪れた。その間エーオさんが私のマンションに遊びに来て 5 日ほど泊まった。彼女は私のマンションでも、暇さえあれば帳簿付けをしていた。「仕事？」と聞くと、「私、忙しくしてたほうが好きなの」と答えた。体力も回復してきた私は、彼女を観光案内して回った。

3. 植毛・SRS・豊胸・フェイスリフト編

タイへ第三回目の渡航：40 日間

- ・植毛 — H. H. H. ヘアーセンターにて
- ・SRS+豊胸+顔の女性化(フェイスリフト) — ガモン・クリニック

12 月、最後の訪タイ。空港で横須賀氏とエーオさんが出迎えてくれた。初日は横須賀氏の事務所に泊めてもらい、翌日には蠟人形館へ連れて行ってもらった。タイの王族や高僧の蠟人形を興味深く見学した。

いよいよ最終章がスタートした。先ず自植毛を受けた。クリニックは HHH という有名な植毛専門医

で、医師の名はウィロートといった。前回の FFS の傷口を隠す目的と、額の生え際を丸く女性的にするためであった。手術前、医師との面談で額に線を引いて生え際の位置を決めた。その後、後頭部の髪をカットされ、そこに麻酔クリームを塗られた。

いよいよ手術が始まった。後頭部にバイブレーターを押し当てられ、そこに麻酔を打たれた。頭皮が切り出された。痛みはなかった。次に生え際にも麻酔を打たれ、ニードルのような機械で次々と穴を開けられていった。歯医者で歯を削られるような機械音がした。その作業と並行して、別室では看護婦が切り取った私の頭皮から毛根を株分けしていた。

穴が開け終わると、看護婦が数人で一本一本植毛をしていった。手術が長時間にわたったので、私は途中トイレにたった。その間中断したが、戻るとまた再開した。手術中、日本語をほぼ完璧に話す女性が通訳としてずっと付き添ってくれた。

手術が終わった。手術跡が赤くぶつぶつになっていた。医師から、植えつけた髪はかさぶたとともに 3 ヶ月ですべて抜け落ちること、3~6 ヶ月したら新しい髪が生え始め 9 ヶ月でほぼ生え揃うこと、などをいわれた。クリニックからもらったバンダナで傷口を隠し、山元氏に送られてコンドータウンへ戻った。翌日、目と目の間が少し腫れた。

SRS の手術前日、タイ人女性スタッフのプイさんがコンドータウンまで迎えに来てくれた。病院はガモンクリニック。カウンセリングの後、すぐ入院して腸内洗浄に入った。手術は S 字結腸法だった。私の場合 5 年前の睾丸摘出で陰嚢が萎縮しており、反転法では膣の深さが取れないというのが S 字にした理由だった。

午後 4 時に下剤を飲まされ、6 時から腸内洗浄が始まった。ベッドの上で体を横向けにし、肛門から大量の水を腸内に流し込まれた。最初の数回は真水ではなくコーヒーだった。急激に下腹部が膨張し、まるで下痢便を瀬戸際まで我慢しているような激しい便意に襲われた。口から逆流するような吐き気も生じた。

一時間おきに水を肛門から大量に注がれ、それをトイレで排出するという作業を繰り返した。回数が増えるごとに慣れるどころか、むしろ苦しさは増していった。手術までに腸内を空っぽにしなければならぬということだった。初日は夜 11 時まで計 6 回行った。最後はへとへとだった。

翌朝 7 時より再び腸内洗浄が始まった。午前中までに、無色透明の水しか便器に出ないようにしなければならなかった。手術は午後 3 時。なんとか腸内洗浄を終え、病室で手術時間を待っていると、

プイさんの携帯に横須賀氏から電話がかかってきた。私に用事ということで電話を代わると、「急いで申し訳ないが、手術をガモンクリニックではなくピヤウエート病院でしたいとガモン先生がいつているのですが」ということだった。

理由を聞くと、私がスポーククリニックで FFS をした際、呼吸が浅くなったり血圧低下を起こしたりしたことで、もしかして麻酔に弱い体質かも知れないと判断し、万一の時に応急処置がすぐ取れるよう、設備が完備された病院でしたいということだった。「執刀医もスタッフも全員移動するので、別な先生が手術をするわけではありません」という言葉で安心し、それに承諾した。点滴をつけながら車椅子で移動した。

ピヤウエート病院で入院の手続きを終えると、横須賀氏が駆けつけてきてくれた。待合室には大きなテレビがあり、オカルト番組が放映されていた。横須賀氏が、「タイ人はお化けが好きで、こんなものばかりですよ」といって緊張をほぐしてくれた。青いガモンクリニックの入院服からピンクのピヤウエート病院の入院服に着替えさせられて、8階の病室に移動した。

手術の時間が来た。手術室に向かう私を横須賀氏とプイさんが見送ってくれた。途中若い男性医師が私に「どういう手術をするのですか」と質問した。「私が SRS です」と答えると、横須賀氏が遠くから、「確認ですから」と大きな声でいった。手術室に入った。ガモン医師がやってきて笑顔で握手をしてくれた。麻酔を入れる前、別な若い男性医師が英語でなにやら注意事項を語ってくれた。うなずくと麻酔が体に流され、すぐに意識を失った。

覚醒するちょっと前、夢を見た。すぐ忘れたが、麻酔の最中に夢を見たのは初めてだった。気が付いて先ず、腸が張るような不快感に襲われた。近くに看護婦がいたので「いつ手術が終わったのですか」とたずねると、彼女は「11時」と答えた。ちょうど8時間だった。その後「痛い？」と問い返されたので、私は日本語で「腸が張る」と答えたが、当然ながらそれは彼女には通じなかった。その後すぐにまた眠ってしまい、再び目を覚ましたときには腸の不快感は消えていた。しばらくして病室に運ばれた。

ピヤウエート病院のベッドが硬いため、腰が痛くて眠れなかった。翌朝、山元氏が来て、午後にガモン医師が検診に来ること、その後ガモンクリニックに移動することを通知してくれた。私は動きたくなかったが、ピヤウエート病院にいては、ガモン医師の指示が上手く看護婦に伝わらない、という理由だった。

午後、ガモン医師が来て包帯を解き、手術跡の血を洗い流す作業をしてくれた。洗浄が終わると再

び陰部を包帯でくるまれた。山元氏が、「腫れや出血もたいしたことなく綺麗です」といった。私が、「いったいどうなっているんですか」と聞いたら、彼は「後のお楽しみです」と答えた。その後、ストレッチャーに乗せられ救急車でガモンクリニックへ搬送された。まるで瀕死の重症患者の気分だった。

ガモンクリニックでの入院が始まった。パイさんが「もうすぐ歩く練習をします。そうして腸を動かし、おならを出さなければいけません。おならが出たら水が飲めます」といった。初めて歩くとパイさんが支えてくれた。しかし立っただけで冷や汗が流れ、二三歩歩いてドーナツクッションにしゃがみこんだ。足が紫色でチアノーゼになっていた。極端な貧血症状だった。

抜糸の後、チーフ看護婦のメームさんが来て「これからダイレクションをします。リラックスしてください」といった。そして私の膣を洗浄し、ろうそくのようなダイレーターを突っ込もうとした。しかし思うように入らず、私はあまりの痛さにのけぞってうめき声をあげた。数回試みた末、ようやくダイレーターが膣内に入った。「最初は30分このまま」と彼女にいわれた。私は毎日こんなことをするのかと思ったら、生きた心地がしなかった。

退院前に自力で排尿できるか確認するとのことだった。まず膀胱に十分な尿を溜められるか、そして尿意を感じるか調べるために、カテーテルのチューブを閉められ大量の水を飲まされた。しばらくして尿意をもよおしたので看護婦を呼ぶと、看護婦がチューブが開き、私の尿が大量にビニール袋に流れ込むのを確認した。3回それを繰り返すと、ようやくカテーテルが外された。

初めて自分で排尿を試みた。女性器から排尿することに勝手が違い、なんだか複雑な気持ちだった。本当に尿が出てくれるか不安だった。トイレにしゃがんで力むと、性器全体がまだ腫れているせいか勢いはなかったが、なんとか自力排尿することが出来た。ようやく退院にこぎつけた。

自分の女性器を恐る恐る見てみると、小陰唇が“たらこくちびる”のように腫れて突き出していた。そこに上下斜めに縫った跡があり、ナプキンにいつも血がこびりついた。術後しばらくシーツに敷いたパットにも血がにじんだが、そちらのほうは治まってきた。しかし尿意の感覚がまだつかめず、排尿はぎこちなかった。いつも尿が真っ直ぐ出ずに、ちょろちょろ左右に散らばってお尻を汚した。

毎日ダイレクションが朝夕2回あった。苦痛だった。ダイレーターは0番から6番まで計7種類あった。0番は直系2センチ弱で、最大の6番は直径3.5センチくらいだった。0番で悲鳴をあげていた私は、将来6番を入れなければならないと聞かされ、「こんなものが入るわけがない」と思った。数日後、0番から1番へサイズアップされた。じっとしてられないほど膣が裂けるような痛

みが続いた。

体力も僅かずつ回復してきた。しかし性器の痛みは尋常でなかった。ペニスの亀頭部分を万力で絞められているような痛さと、睾丸の袋をカッターナイフで切り刻まれたような痛さが並行した。無いはずの男性器が痛いといった感じだった。特に立っているとジンジン痛くなるので、ひどいときはベッドで横になった。

退院から 8 日目に、最後の手術である豊胸に臨んだ。手術前から、「豊胸が一番痛いですよ。手術後のマッサージでみんな泣きますよ」と横須賀氏やプイさんからおどされていた。

横須賀氏が、「今、下が痛いでしょうから、そこに上まで痛くなったら精神的負担も大きいでしょう。豊胸は遅らせますか？ どうせビザがあるんですから、もう少し経ってからでもいいですよ」と気づかせてくれた。しかしプイさんは、「痛いのはいっぺんで終わらせたほうがいいよ。やっちゃいな」と励ました。私はプイさんの意見に賛成だったので、予定の日程で手術することにした。早くすべて終わらせてしまいたかった。手術は豊胸と、顔、首のリフトアップだった。

豊胸バッグの大きさをプイさんに選んでもらった。プイさんはいくつかのバッグを私の胸に当て、「あなたの体格なら 300cc がいいと思うよ。250 だと小さいと思う」といった。私は彼女を信頼し 300 を入れることにした。「300 だと C カップになると思う」と彼女は添えた。

手術の日が来た。クリスマスイヴだった。最後の手術なので、私は無事終わるようにと、死んだ父の名刺をプイさんから足に貼り付けてもらい、お守りにした。メームさんがその様子を見て笑った。私はメームさんに、「今日はイヴなので、ガモンサンタから胸をプレゼントしてもらおう。眠りから覚めたら枕元じゃなくて、胸元にバストがプレゼントされている」と冗談をいった。

手術は無事終わった。手術前から豊胸はとても痛いと聞いていたので覚悟していたが、覚醒してみると痛くなかった。手も上がり、腕も思いのほか動かせた。ただバッグを入れた両脇と、リフトアップした両耳の後ろにドレーンが突き刺さっていて鈍痛があった。山元氏が来て、私が手を上げるのを見ると、彼は「それだけ上がれば十分です」と笑顔でいった。私がパーツを切らせると、彼はなんども銀行へ両替に行ってくれた。

年末に入り、プイさんが休暇を取って実家へ帰った。山元氏も休暇に入った。ガモンクリニックでは、医師、看護婦、スタッフ全員が、年末バーベキューパーティーをしていた。私はまだベッドの上で起き上がれず、笑い声を遠くから聞いていた。「年末で誰もいないんです」と、横須賀氏が見舞いに来てくれた。私が、「ぜんぜん痛くないですよ」というと、彼は「とてもラッキーなケース

です」といった。その後、彼はバーベキュー会場からエビを皿に取ってきて、箸で私に食べさせてくれた。今はほとんどスタッフに任せの横須賀氏だが、5年前はすべて彼一人でお客をアテンドしていた。私はそのときのことを少し思い出し、ほんのり嬉しかった。

ダイレーションと並行してバストのマッサージが始まった。バストはマッサージを怠ると硬縮を起こすとのことだった。毎日2回、両脇から二人の看護婦が私の左右のバストに体重をかけて約30分マッサージをした。ダイレーションは痛いわ、マッサージは痛いわで、大変だった。正月開けにパイさんが戻ってきて、「痛くても我慢しないとバストの形が良くなるよ」と叱咤した。

パイさんは私をなんども買い物に誘ったり、日本料理店に連れて行ってくれた。私が、ダイレーターの6番を見て「こんなの無理」というと、パイさんは、「大丈夫。それどころか、きっと7番が欲しくなるよ。でも7番はないけどね」と答えた。横須賀氏は逆に、「6番なんて外人とセックスする人が使うんじゃないですか。あんな太い日本人はいませんよ」とうそぶいた。

最後のフォローアップに行った。私はそこでいくつかの質問をガモン医師にした。一番気になったのは小陰唇に壊死したような白い部分があったことだった。医師はそれを「大丈夫。治る」といった。山元氏も「黒いのはよくないが、白いのは大丈夫」といった。排尿の際、尿がちらばってお尻を伝うのは治るかとも聞いたら、パイさんが、「女性もそうなるよ」と真面目な顔でいった。医師は「OK」と私に診断を下した。

帰国の時が近づいた。私もだいぶ歩けるようになっていた。エーオさんがバンコク観光に誘ってくれた。日中、プラッケーオとプラッポーを見学し、夜は私のリクエストしたタイ式ボクシングの試合をルンピニースタジアムで見学した。プラッケーオで偶然タイ王室のシリバー・チュダボーン王女を見た。王女は何人もの護衛に囲まれて、笑顔で手を振り私の目の前を通り過ぎて行った。とてもラッキーだった。傷口がまだ痛いため、私は先を歩くエーオさんによちよちついていくのがやっとだった。

帰国の日、最後に横須賀氏の事務所で食事をいただいた。「ピシェート、スポン、ヨーサガン、ウィロート、ガモン、このタイ医療機関のそうそうたるメンバーからすべて執刀を受けるなんて、あなたは記録保持者です」と、横須賀氏が面白いことをいった。これも傷だらけの人生か、と私は思った。空港へは迎えのときと同じく横須賀氏とエーオさんが送ってくれた。

横須賀氏と空港で別れた後、ハプニングがあった。出国審査でパスポートを見せたら、審査官に捕まってしまったのだ。そういえばパスポートの写真は、FFSもホルモン治療もしていない6年前

のもので、横須賀氏が、「全く分かりません」といったあの写真だった。怖い形相で「名前をいってみろ」「生年月日をいってみろ」と次々質問され、やっと許してもらったと思ったら、今度は女性が来て「あなたは本当に男か？私について来なさい」と別室に連れて行かれた。そこでも質問を受け、私はなんとか難を逃れたが、最悪の場合手術証明書を提示しなければならないと覚悟した。本当に肝を冷やした。

日本でも、しばらくは体のケアとダイレクションに明け暮れた。6ヶ月以内に6番のダイレーターを入れなければならないといわれていたが、なんと3ヶ月で入った。ダイレクションを始めた当時、0番で悲鳴をあげたのがなんだったのかと思うくらいその後のサイズアップは順調だった。その意味で、「大丈夫。7番が欲しくなる」といったプイさんは正しかった。

小陰唇の腫れも引いて小さくなった。膣付近の赤みも消え、膣口が引っ込み目立たなくなった。痛みのほうも4ヶ月で消え、自転車にも乗れるようになった。ダイレクションはまだ少し痛い、それでも6番のダイレーターが6インチ（15センチ）は十分入る。

体を100%女にしたのだから、以後の生活も100%女として生きなければ意味がないと思い、男性時代の衣類はすべて処分した。わざとボディーラインが強調できる服を買ってきて、胸をそらして歩いている。マンションの管理人や近所の人、最初は目を丸くして驚いていたが、私が普段どおり挨拶していると、相手も普通に付き合っただけで冗談まで返してくれるようになった。

仕事を辞め、見知らぬ地で暮らす私にとって、友達作りは欠かせなかった。コミュニティーに参加しようと女性名を名乗り教会に通い始めた。年配の教会員はおろか、20代、30代の女性教会員でも私を元男と気が付かない。まだ一般の意識として、性転換者などは、芸能界か大都市のネオン街にしか日本ではいないと思っているのだろう。おかげさまで少しずつ友達も出来た。しかしおしゃべりしたり食事をしたりする友達は皆女性ばかりで、まだ男友達はできていない。今後の課題だ。

仕事を探そうと思うと、戸籍変更が不可欠に思えた。女性としてハローワークで登録し、女性名で紹介状を出してもらっているが、雇用保険等の関係上いざ面接というとき必ず現状をカミングアウトしなければならない。私はその不便さに業を煮やし、戸籍の変更をもくろんでジェンダークリニックを訪ねた。私が手術の証明書を見せると、院長は「え、ピヤウエート病院でやったの。僕もピヤウエート病院で手術したことあるんだよ」といった。自身でもSRSの手術を手がけるらしく、「特例法の施行前は、いくら書類を書いても裁判所にはねられたけど、施行されてからすべて僕は通してるからね。任せてください」と応じてくれた。ずい分古くから性同一性障害患者を支援してきた人のようだ。

いずれにせよ、私がやってきたようなことは、勇気、執念、お金、健康、この四拍子が揃っていないと出来ないことである。しかし私にとって最大の勇気は、この手術のために会社を退職したことだった。築いた立場を投げ捨てるということは、新しい道に踏み出すより勇気のいることだった。よく結婚より離婚が大変というが、その意味が分かった。会社を辞めるときに要した勇気に比べれば、手術に望む勇気など取るに足りないものだったからだ。

思えば、私の人生は奇妙奇天烈である。この奇天烈人生の片棒を担いだのが(株)ジェイ・ウェブ・クリエーションであり、その社長横須賀氏であったことはいうまでもない。彼とその家族、スタッフには心から感謝している。

激烈な日本のサラリーマン社会を男性として先頭を走っていた私が、今や女性として教会の婦人会に参加して穏やかに生活している。なんだか自分でも笑ってしまう。どこからか、あの、世にも奇妙な物語のサウンドと、タモリのナレーションが聞こえてきそうだ。